

ハヤブサ 英:Peregrine Falcon 学: *Falco peregrinus*

1. 分類と形態

分類: タカ目 ハヤブサ科

全長:	♂ 350-400mm	♀ 450-500mm
自然翼長:	♂ 305-333mm	♀ 348-378mm
尾長:	♂ 136-152mm	♀ 136-181mm
露出嘴峰長:	♂ 20-21mm	♀ 22.5-26mm
ふ蹠長:	♂ 43-48mm	♀ 52-57mm
体重:	♂ 500-680g	♀ 800-1200g

※全長と体重はMonneret (2000), その他は清棲(1991)による。

羽色:

成鳥, 幼鳥とも雌雄の差は小さいが, 個体差は大きく, 光の当たり具合により色合いが異なって見えることがある。成鳥は一般的に, 頭はやや青味を帯びた黒に近い灰色で, 一部が目目を囲むように頬の辺りまで伸びている。うなじから背中に行くにつれて黒味が薄れる。



写真1. ハヤブサ。
[Photo by 相澤成信]

腰の辺りが最も淡く, 青味を帯びた明るい灰色になり, また尾の先端に行くにしたがって黒味を帯びてくる。しかし, 尾の先端には細いバフ色の羽縁がある。下面は白またはオフホワイト(淡いピンク色を帯びている個体もいる)の地に黒に近い灰色の横斑が密に入る。横斑はオスの方が細かく, また喉から胸にかけて斑がないオスも多い。嘴は先端部は青味を帯びた黒色で, 根元の部分は淡い灰色。蠟膜, 脚, アイリングは鮮やかな黄色で, オスの方が黄色味が強い。瞳孔と虹彩はいずれも黒色で区別が付きにくいために, 目が大きく見える。一方, 幼鳥は上面が暗褐色で, バフ色の細い羽縁がある。特に尾の先端のバフ色の羽縁は幅広で目立つ。下面はバフ色から薄い茶までの地に暗褐色の太い縦斑が目立つ。蠟膜とアイリングは青味を帯びた灰色, 脚は薄い黄色である。幼鳥羽は翌年の秋ごろまで残る。

鳴き声:

しり上がりに「キーキー」と金属的な甲高い声で鳴くのが一般的な鳴き声である。テリトリー内に侵入した他のハヤブサに対して威嚇する時は, 喉が詰ったような声で「カキョッカキョッ」と鳴く。また, 幼鳥は巣立ち後一ヶ月ぐらいの間は「ピューエピューエ」と頻りに鳴いて親に餌をねだる。メスはオスに餌をねだるとき, 巣立ち幼鳥と似た声で鳴く。

2. 分布と生息環境

分布: ハヤブサは分布が広く, 南極大陸とニュージーランドやハワイ諸島など一部の諸島を除いて全世界に20亜種前後が生息する(Cade 1982)。北米やユーラシア大陸の北部で繁殖する個体群は繁殖期が終わると, 越冬のために長距離の渡りを行なう。日本では主要四島およびその周辺で繁殖し, 一部が冬期に短距離の移動を行なう程度で, 本格的な渡りはしない。なお, 硫黄列島には固有亜種のシマハヤブサ(*F. p. furuitii*)が生息していたが, 1940年以降の状況は不明で, 2007年6月の南硫黄島調査時にも生息は確認されていない。

生息環境:

餌となる小型, 中型の鳥類が豊富で, 営巣場所に利用できる断崖や大岩がある海沿いや河川の流域がおもな生息場所である。さらに, 餌が豊富な地域では, 人工の構造物(例えば, 高圧鉄塔, 高層ビル, 採石場跡地など)を営巣場所として利用する繁殖事例が近年増えている。冬期には, 餌となる鳥類が豊富な干潟や大きな河川の流域などの開けた場所がよくみられ, 越冬のために北極圏や寒帯から日本へ渡って来た個体が利用していると考えられる。

3. 生活史



繁殖システム:

一夫一妻の繁殖が一般的であるが, まれに一夫二妻の繁殖事例も報告がある(Monneret 1983)。日本で繁殖しているハヤブサは一般的に非繁殖期も雌雄ともに繁殖場所に留まっているので, 同一の相手とつがい関係を維持していると考えられる。繁殖は雌雄が役割分担をしながら協力して行なうが, 前年に巣立った幼鳥がヘルパーのように繁殖活動に関わった事例も少数ながら報告されている(Kurosawa & Kurosawa 2003)。

営巣場所:

ハヤブサ科の仲間は自分で造巣することはなく, ハヤブサは崖の窪みや岩棚などにじかに産卵する。海岸や内陸に発達する段丘崖や大岩が営巣場所として利用され, 日本では海沿いの断崖が多い。1950年代以前には, ドイツなどの中欧にはノスリなどの他の猛禽類の古巣を利用してチゴハヤブサのように樹木で繁殖を行っていた個体群が存在した(Cade *et al.* 1988)。自分で造巣しないので, 巣の位置や方角は崖の形状や構造に大きな影響を受けるが, 巣の高さは崖面の下から半分から3分の2ほどの位置が多い。営巣場所やねぐら場所周辺の岩肌には白い糞が付いていることが多い。



写真2. メス親から餌をもらう巣内ヒナ。

産卵・抱卵・育雛時期:

産卵は3月から4月中旬に行なわれるが, 北海道では4月の上旬が多い。一腹卵数は通常は3~4卵で, 2卵や5卵の事例も報告されている(Ratcliff 1993)。平均的な卵の大きさは52×41 mmで, 赤味がかかった褐色地に暗褐色のまだら模様が入る。抱卵は主にメスが行ない, オスはメスが餌を食べている間などに抱卵を代わる程度である。本格的な抱卵は30日ほど続き, メスはヒナの孵化後10日ほど抱雛を続ける。その間, オスは狩りをして餌を巣へ運搬するが, ヒナへの給餌はメスが行なう。孵化後2週間ほどすると, メスは巣の付近の高い場所にとまってヒナを見守りながら, オスが餌を運んで来るのを待つようになる。4週間ほどすると, メスも巣場所を離れて狩りに出る。ヒナは孵化後5~6週間で巣立つ。1巣の巣立ちヒナは1~4羽で, 平

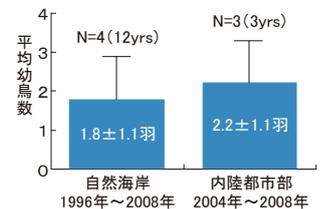


図1. 北海道の繁殖地2か所におけるハヤブサの平均繁殖率(幼鳥羽数±SD)。

均2~3羽の場合が多い(図1)。巣立ち後3週間ほどはオス親が捕まえて来た餌もメス親が受け取り、幼鳥に与えるが、以後はオス親は空中で直接、幼鳥に餌渡しを行なうようになる。時には、まだ飛べる状態の小鳥を幼鳥の目の前で放すこともある。これは餌渡しと言うよりは、狩りの練習も兼ねていると考えられる。一般的には、親鳥から餌をもらいながら徐々に狩りの技術を習得し、2ヶ月ほどで分散して行く。しかし、中には12月頃まで親のテリトリー内に居残り、餌をねだる幼鳥もいる。また北海道の営巣地では、翌年の繁殖に入っても(3~7月)前年に巣立った幼鳥が親のテリトリー内(営巣場所付近)において、親鳥から積極的な追い出しを受けないこともある(Kurosawa & Kurosawa 2003)。

4. 食性と採食行動

餌動物はほとんどが鳥類で、ヒヨドリやハトなどの中型鳥が大半を占めるが(図2)、スズメやカラ類の小鳥やウミネコ、また高速飛行をするアマツバメを捕食した例もある。げっ歯類を捕食した例はまれで、魚類はほとんど食べない(小堀・平野2006)。



写真3. 海上を渡るヒヨドリの群れを襲うハヤブサ。
[Photo by 伴野俊夫 噴火湾渡り鳥研究会]

ハヤブサの翼は先端が尖ってアスペクト比(翼の長さとの比)が大きいので、高速飛行に適している。スピードを活かした狩りを行なうには障害物のない広い空間を必要とし、日本では営巣に適した断崖はほとんどが海辺にあるので、狩りは洋上や干潟で行なわれることが多い。断崖の突き出した先端や高い人工構造物(高圧鉄塔や電波塔など)にとまり、獲物を待ち伏せる。獲物を発見すると、翼をすばやく羽ばたいて、獲物の斜め上空へ出る。その後からだを反転させると、翼を半ば閉じて、獲物めがけて一気に急降下する。ハヤブサの急降下時の最高速度に関しては様々な推定や推測が行なわれて来たが、米国のデューク大学の研究者がおおよそ294 km/hという実測値を出している(Enderson 2005)。また、ハヤブサは帆翔にも優れ、気流を利用してノスリ並みのホバリングも行なう。上空高く(400~500 m)舞い上がると、旋回やホバリングをくり返ししながら、獲物が眼下を通過するのを待つこともある。獲物を掴み取る場合と蹴落とす場合があり、蹴落とす場合は急降下の反動を利用して、急上昇し、宙返りしたのち落下する獲物を空中で捕捉する。

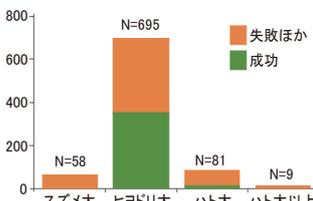


図2. 秋期にハヤブサが捕食対象とした鳥類の大きさ。(山田 2001より作成)

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 全国的なモニタリング体制の確立と法の整備

ハヤブサは欧米で1950~60年代に有機塩素系農薬(DDTやディールドリンなど)の影響で成鳥の減少と繁殖率の低下により、絶滅の危機に瀕した(Ratcliff 1993)。その折

にハヤブサの個体数の激減が明らかになったのは、英国で行なわれた全国調査がきっかけだった。その後、多くの人々による地道な保護努力が実を結び、個体数を回復したことは記憶に新しい(Cade *et al.* 1988, Cade & Burnham 2003)。各地でハヤブサは姿を消していたが、地元では地域的な現象と考えていて、調査が行なわれるまでは事態の深刻さに気付かなかった。この調査がなかったら、ハヤブサは絶滅してしまったかも知れない。こうした事態を避け、迅速に保護対策を講じるためには、全国規模のモニタリング体制を確立させ、データの蓄積を行なうとともに、原因究明のために研究機関の連携と協力体制も確立させる必要がある。また、ハヤブサなどの猛禽類に限らず、他の鳥類種にも当てはまることだが、現行の紳士協定的な保護法のもとでは有効な保護を行なうのは難しい。保護を実効のあるものにするためには強制力を備えた保護法の整備が急務である。

6. 引用・参考文献

Cade, T.J. 1982. The Falcons of the World. Comstock; Cornell University Press, Ithaca, NY.
 Cade, T.J., Enderson, J.H., Thelander, C.G., & White, C.M. (eds.) 1988. Peregrine Falcon Populations. Their management and recovery. The Peregrine Fund, Inc. Boise, ID.
 Cade, T.J. & Burnham, W. (eds.) 2003. Return of the Peregrine: A North American Saga of Tenacity and Teamwork. The Peregrine Fund, Boise, ID.
 Enderson, J. 2005. Peregrine Falcon: stories of the Blue Meanie. University of Texas Press, Austin, TX.
 Kurosawa, T. & Kurosawa, R. 2003. A helper at the nest of Peregrine Falcons in northern Japan. The Journal of Raptor Research. 37:340-342.
 清棲幸保. 1991. 野鳥の事典. 東京堂, 東京.
 小堀脩男・平野敏明. 2006. ハヤブサは魚が嫌い? Accipiter 12:37-40.
 Monneret, R.J. 1983. La l'aide a l'elevage chez le Faucon pelerin. Alauda 4:241-250.
 Monneret, R.J. 2000. Le Faucon Pelerin. Delachaux et Niestle S.A., Lausanne-Paris.
 Ratcliff, D.A. 1993. The Peregrine Falcon. T & AD Poyser. London.
 山田一太. 2001. 瀬戸内地方におけるハヤブサ *Falco peregrines* の生息状況. Goshawk 3:4-9.

執筆者

黒澤 隆 噴火湾渡り鳥研究会

東京生まれ。20年ほど前にスキューの帰りに足を伸ばした室蘭の絵鞆半島でハヤブサに魅せられて、室蘭通いが始



まり、秋の猛禽類の渡りにもはまり、ついに2008年秋、測量山のふもとに住み始めました。窓辺で猛禽類の渡りを堪能しています。近所のスーパーへ買い物に行く途中で上空を見上げると、ハヤブサの姿が目に見え込んで来るときもあり、坂を下りてスーパーへ行くのも億劫でなくなりました。